

令和 7 (2025)年度

シラバス

- 大学院 -

科目No.	MCS01-1R	授業形態	演習	開講年次	1 年次
授業科目名	英語文献講読	担当教員 E-Mail	松尾 加代		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	共通科目		必 修	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	専門領域の最新の学術情報を身につけるためには、英語論文を検索して必要な文献を探し出し、それらを正確かつ精緻に読み解く力が必要とされる。本科目では、Nature、Science、Cell、Pro NAS などの雑誌から、認知とリハビリテーションに関する自分に必要な論文を検索し、精読して理解する能力を身につけることを目指す。PubMed や PsycInfo などのデータベースを使って検索し精読した論文の発表を繰り返すことを通して、論文読解の力を養う。				
到達目標	1. 論文検索のデータベースが活用できる 2. 英語論文の検索が効率的にできる 3. 英語論文の構成を理解し、必要な情報を素早く入手できる 4. 認知リハビリテーション領域の論文で使用される英語表現や専門用語が理解できる 5. 英語論文の内容を理解できる 6. 英語論文の内容についてディスカッションができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	英語論文を読む目的	英語論文を読む目的を知り、リサーチクエスチョンを考える。		松尾 加代	
2	論文の構成（１）	英語論文の構成、および本文のパラグラフの関係性について学ぶ。		松尾 加代	
3	論文の構成（２）	英語論文の構成、および本文のパラグラフの関係性について学ぶ。		松尾 加代	
4	論文の構成（３）	英語論文の構成、および本文のパラグラフの関係性について学ぶ。		松尾 加代	
5	論文の構成（４）	英語論文の構成、および本文のパラグラフの関係性について学ぶ。		松尾 加代	
6	論文の検索方法	データベースを使った論文の検索方法について学び、演習する。		松尾 加代	
7	観察研究の論文講読	観察研究に関する英語論文を読み解く		松尾 加代	
8	介入研究の論文講読	介入研究に関する英語論文を読み解く		松尾 加代	
9	RCT 研究の論文講読	RCT 研究に関する英語論文を読み解く		松尾 加代	
10	アブストラクトの作成（１）	与えられたテーマについて、論文を検索する。入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）		松尾 加代	

11	アブストラクトの作成（2）	与えられたテーマについて、論文を検索する。 入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）	松尾 加代	
12	アブストラクトの作成（3）	与えられたテーマについて、論文を検索する。 入手した論文の本文を読み、アブストラクトを作成する。（グループワーク）	松尾 加代	
13	論文の発表（1）	個人で検索・精読した論文の概要について発表を行う。	松尾 加代	
14	論文の発表（2）	個人で検索・精読した論文の概要について発表を行う。	松尾 加代	
15	論文の発表（3）	個人で検索・精読した論文の概要について発表を行う。	松尾 加代	
成績評価方法		グループワーク及びグループディスカッションの内容 50% 論文発表の内容 50%		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	康永秀生	必ず読めるようになる医学 英語論文 究極の検索術× 読解述	金原出版	2021 年
参考文献				
事前・事後学修 留意事項		基本的な英文法を理解し、自主的に英語文献を読む意欲が求められる。		
研究室	1 号館 第 4 研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MCS02-1R	授業形態	演習	開講年次	2 年次
授業科目名	医学英語特論	担当教員 E-Mail	野口 ジュディー		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	共通科目		必 修	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	本科目の目的は、認知リハビリテーション学分野における学術論文の読み書きのスキル、およびアカデミック・プレゼンテーション・スキルを学ぶことである。英語学術論文執筆においては、論文作成のルールを理解すること、具体的な執筆の手順を理解すること、そしてコーパスや機械翻訳などのオンラインツールを活用して実際に学術論文を作成することを試みる。アカデミック・プレゼンテーションに関しては、書き上げた学術論文内容を、どのように口頭発表、ポスター発表に繋げるか、その方法を学ぶ。本科目では、各回のテーマに沿っての講義と連動して、課題作成を進める。全15回で具体的かつ実践的な研究発信スキルを修得する。				
到達目標	1. ESP (English for Specific Purposes) の考え方を身に着ける 2. 英語論文の文書パターンが理解できる 3. コーパスやオンラインツールの活用ができる 4. 英語論文を書くことができる 5. 英語での口頭発表ができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	英語論文作成の導入	ESP の考え方、英語論文の文書パターン、便利なツールなどを学び、発音実習をする。		野口 ジュディー	
2	英語論文執筆の基礎	OCHA 思考法、PAIL 分析、コーパス、ジャンル、ムーブ、スタイルを学び、実習する。		野口 ジュディー	
3	英語論文執筆の実践 (1)	投稿規定の読み込みなど、論文を書き始める前にするべきことについて実践を通じて学ぶ。		野口 ジュディー	
4	英語論文執筆の実践 (2)	タイトルの決め方、Abstract の書き方について実践を通じて学ぶ。Portfolio について学ぶ。		野口 ジュディー	
5	英語論文執筆の実践 (3)	Introduction を分析し、書き方について実践を通じて学ぶ。References の書き方を学ぶ。		野口 ジュディー	
6	英語論文執筆の実践 (4)	Materials and Methods と Results の書き方について実践を通じて学ぶ。		野口 ジュディー	
7	英語論文執筆の実践 (5)	Discussion と Acknowledgments を分析し、書き方について実践を通じて学ぶ。		野口 ジュディー	
8	英語論文執筆の実践 (6)	Cover letter の書き方、英語論文執筆のためのチェックリストの活用の仕方について実践を通じて学ぶ。		野口 ジュディー	
9	英語プレゼンテーション (口頭発表) の導入	プレゼンテーションの種類や効果的な発表の仕方について、書き言葉と話し言葉の違いなどを学ぶ。Recitation 課題と Recitation 評価表について理解する。		野口 ジュディー	

10	アカデミック・プレゼンテーションについて	各自 Recitation を実施し、評価表に記入する。 自分の研究を3MTプレゼンテーションとして準備することを学ぶ。	野口 ジュディー	
11	アカデミック・プレゼンテーションの内容	3MT プレゼンテーションを実施し、評価を記入する。 アカデミック・プレゼンテーションの構成、挨拶と自己紹介、研究の背景と目的、研究の方法（実験の材料、実験装置の構造・動作、実験の概要）、研究の結果の表現方法について実践を通じて学ぶ。	野口 ジュディー	
12	アカデミック・プレゼンテーションの内容	プレゼンテーションのスライド、スクリプトの表現方法、最終発表の準備について実践を通じて学ぶ。	野口 ジュディー	
13	ポスター発表について	ポスター発表の目的、構成とレイアウトを学び、ポスターを作成し、スクリプトも作成する。	野口 ジュディー	
14	発表準備	役に立つ英語表現の効果的な活用を確認し、口頭発表・ポスター発表の準備を行う。	野口 ジュディー	
15	口頭発表・ポスター発表の本番	受講生各自口頭発表とポスター発表（質疑応答含む）を行う。評価表へ記入し、提出する。	野口 ジュディー	
成績評価方法		Tasks 40 %、Portofolio 30%、口頭発表 30 % として総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
参考文献	野口ジュディー・深山晶子・村尾純子・浅野元子	理系英語のライティング Ver. 2	アルク	2020
	野口ジュディー・深山晶子・村尾純子・浅野元子	理系英語のプレゼンテーション Ver. 2	アルク	2020
事前・事後学修留意事項	基本的な英文法を理解し、自主的に英語による論文執筆およびアカデミック・プレゼンテーション（パワーポイントを使った口頭発表・ポスター発表）をしようとする意欲が求められる。			
研究室	e-mail にて連絡すること。		オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MCS03-1R	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	リハビリテーション疫学・統計学特論	担当教員 E-Mail	古井 透		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	共通科目		必 修	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	リハビリテーション領域疫学研究法の基礎を講義すると同時に、リハビリテーション分野での実践上の問題点と対応法について事例研究を通じて学ぶ。クリニカルニーズを把握し、リサーチクエスションに発展させ、研究仮説を立て、適切な疫学研究を構築する過程を習得し、その解析と解釈について学ぶ。疫学的思考、因果関係、信頼性の確保、疫学研究デザイン、バイアスや交絡因子、回帰と相関、層別解析、モデルに基づく解析、生存時間解析、多変量解析手法、主成分分析手法などの統計学的手法について学ぶ。				
到達目標	1. 研究仮説を立てることができる 2. 研究仮説に基づき、適切な研究デザインを組み立てることができる 3. 得られたデータに対し、適切な統計解析法を選択することができる 4. 統計解析をコンピュータを用いて実行することができる 5. 統計解析の結果から、その限界を含め何がいえるかを指摘することができる 6. リハビリテーションにおける EBM の重要性について指摘することができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	疫学研究の進め方	疫学研究の進め方の全体像を学修する。		古井 透	
2	EBM と情報検索	EBM の概念と情報検索の方法を学修する。		古井 透	
3	横断研究と縦断研究	コホート研究における横断研究と縦断研究の違いを理解する。		今岡 真和	
4	観察研究と介入研究	観察研究と介入研究の計画立案の方法を学修する。		今岡 真和	
5	記述統計と推測統計	データの記述と推測に関する統計方法を学修する。		今岡 真和	
6	有意差の検定とリスク比較	有意差検定、リスクの比較を理解する。		今岡 真和	
7	相関・回帰分析	相関分析と回帰分析を理解し活用する技術を学修する。		今岡 真和	
8	リハビリテーション疫学	リハビリテーション疫学の特徴を学修する。		岡 健司	
9	パラメーター	疫学解析に必要となるパラメーターの選択と活用を学修する。		岡 健司	
10	効果判定	効果判定に必要となるパラメーターの選択と課題を学修する。		岡 健司	
11	多変量解析の基礎	分散分析・生存時間分析などについて多変量解析の手法を学修する。		中谷 勇哉	
12	エクセルを用いた統計解析	記述統計の出力と基本的な検定についてエクセルを用いる手法を学修する。		中谷 勇哉	
13	SPSS を用いた統計解析(1)	SPSS を用いた分散分析と重回帰分析を学ぶ。		中谷 勇哉	

14	SPSS を用いた統計解析(2)	SPSS によるロジスティック回帰分析を学ぶ。		中谷 勇哉
15	統計結果の解釈と注意点	バイアス、交絡、第一種の過誤など統計の問題点を理解する。		中谷 勇哉
成績評価方法		課題レポート(30%)と期末レポート(70%)により評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
参考文献	対馬栄輝	『SPSS で学ぶ医療系データ解析 第2版』	東京図書	2016
事前・事後学修留意事項	毎回復習をして知識を定着させておくこと。コンピュータの基本的な操作については事前に慣れておくこと。			
研究室	1号館 講師控室	オフィスアワー	授業終了後、質問を受け付ける。	

科目No.	MCS04-1R	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	認知機能・認知予備力特論	担当教員 E-Mail	武田 雅俊		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	共通科目		必 修	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	認知機能は、広義には大脳機能全体をさす場合もあるが、狭義には知覚連合野・運動連合野・辺縁系を中心とした大脳領域により担われる。認知機能は加齢によりゆっくりとした低下を示すだけでなく様々な精神神経疾患により障害される。このような認知機能と人の社会生活との関わりについて学修する。 認知予備力とは、脳の老化や病理過程に拮抗して認知機能を維持する能力のことであるが、認知予備力について、脳予備力と対比させながら理解し、認知予備力を低下・向上させる因子について学修する。脳内病理と臨床症状の間に介在し、認知機能を維持する作用が想定されており、知能(IQ)・教育歴・仕事・趣味・社会参画などの心理社会要因により影響されていることも知られているが、認知予備力の生物学的な本体については殆ど解明されていない。本科目では、認知予備力の概念と最新の知見を総合的に学び、認知予備力を高める方策を考える能力を学修する。 脳科学リハビリテーションのセミナーに参加して、能動的に学習する				
到達目標	1. ヒトの生活における認知機能の重要性を理解することができる 2. 認知機能を低下あるいは向上させる因子について理解することができる 3. 認知予備力について最新の知見を理解することができる 4. 認知予備力を低下あるいは向上させる因子について理解することができる 5. 認知予備力の生物学的本体について理解することができる 6. 認知予備力を向上させる戦略について考えることができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	加齢による認知機能低下と軽度認知機能障害(MCI)の臨床	認知機能の基盤と脳老化による認知機能低下機序と MCI の病態について学修する。		武田 雅俊	
2	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー (1)	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する		武田 雅俊	
3	認知症の臨床	認知症の臨床病像について学修する。		武田 雅俊	
4	認知予備力の概念とライフスタイル	認知予備力の概念とライフスタイルとの関係について学修する。		武田 雅俊	
5	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー (2)	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する		武田 雅俊	
6	認知予備力を低下させる因子	認知予備力を低下させる生物心理社会的要因について学修する。		武田 雅俊	
7	認知予備力を維持・向上させる因子	認知予備力を維持・向上させる生物心理社会的要因について学修する。		武田 雅俊	
8	認知機能の神経解剖学、正常な家系変化と病的な加齢変化	認知機能の基盤となる神経解剖学、加齢変化について学修する。		武田 雅俊	
9	認知症脳の病理(マクロ)	認知症をきたす各種疾患の神経解剖学(マクロ)所見について学修する。		武田 雅俊	

10	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー（3）	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する	中村 美砂
11	認知症脳の病理(ミクロ)	認知症をきたす各種疾患の神経解剖学(ミクロ)所見について学修する。	中村 美砂
12	脳老化の生理学的変化と生理学的指標	脳の老化に伴う生理学的変化と生理学的評価方法及び検査手法について学修する。	中村 美砂
13	認知機能低下の生理的变化	認知機能低下の生理的指標について学修する。	中村 美砂
14	認知機能・認知予備力特論 CRRC セミナー（4）	セミナーに参加し、本授業科目の視点から意見を発表する	中村 美砂
15	認知予備力を反映する生理学的変化	認知予備力を反映する生理学的指標について学修する。	中村 美砂
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社
	武田雅俊編著	「現代老年精神医療」	永井書店
参考文献			
事前・事後学修 留意事項	特になし		
研究室	1号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MCS06-1R	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	地域支援学特論	担当教員 E-Mail	古井 透		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	共通科目		必 修	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	地域支援学特論では、地域が少子高齢化によって危機に瀕したと言われる現状を踏まえて、その「逆境」にこそ活路を見出そうとする。住民による工夫と連帯を通じて、地域が制度依存を脱し地域の課題の解決に貢献することも含まれる。これらの挑戦を担う人材を育成するために、リハビリテーション医療機関、NPO、社会福祉法人、行政など多様なセクターのマネジャー層にも教育の機会を提供する。本学教員に加え、地域再生に注目すべき成果を挙げている実務家たちの活動を良く知る外部講師も迎え、一体となって実践的な知識と技能を学修する科目である。				
到達目標	1. 介護保険以前の地域課題を論ずることができる 2. 逆転の発想ができる 3. 住民主体の地域づくりを定義できる 4. 脱行政の発想ができる 5. 児童福祉と少子化をつなげて考えることができる 6. 工夫と連帯を解決につなげるアクターを探すことができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	地域ケア元年	介護保険以前の地域支援の歴史について1990年の広島・熊野町の取り組みを学修する。		古井 透	
2	障害観と地域1	熊野町の取り組みから地域住民・高齢者の障害観について学修する。		古井 透	
3	インクルーシブで持続可能な社会	その後の自験例などから、高齢者の障害観は変えられるのか、その可能性を学修する。		古井 透	
4	住民主体の地域づくり1	住民主体の地域づくりの意義(海外との比較から)を学修する。		村川 浩一	
5	住民主体の地域づくり(防災)	全国組織における調査研究から、地域防災における住民主体の地域づくりを学修する。		村川 浩一	
6	住民主体の地域づくり(認知症)	認知症への初期対策における住民主体の地域づくり事例紹介を学修する。		村川 浩一	
7	リーチアウトではなくリーチ・インについて	リハビリテーション医療機関、社会福祉法人の地域における貢献を学修する。		嶋野 広一	
8	脱行政の当事者参画	アクセシビリティについての障害当事者参画による工夫と連帯を学修する。		古井 透 久利 彩子	
9	少子化と児童福祉	少子化の進展と児童福祉について学修する。		野村 和樹	
10	マネジャーが求められること	自助グループ、NPO、介護施設、行政など多様なセクターのマネジャーが求められることを学修する。		嶋野 広一	
11	依存を脱し課題解決につなげるビジョン	産官学連携による認知症予防ボランティア養成講座の企画立案について学修する。		今岡 真和	
12	住民による工夫と連帯をどう組織するか	産官学連携による認知症予防ボランティア養成講座の実施の経過化を学修する。		今岡 真和	

13	工夫と連帯を解決につなげるアクター	産官学連携による認知症予防の連帯を成長につなげたアクターは誰なのかを学修する。	今岡 真和
14	キーパーソンになる	住民による工夫と連帯について、NPO、社会福祉法人、行政など多様なセクターのマネジャーの望むことを学修する。	古井 透・村川 浩一
15	まとめ	学生からのフィードバックと質疑応答	古井 透・村川 浩一
成績評価方法	最終講での発表内容(40%)と期末レポート(60%)にて評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社
	開講後に指定する		
参考文献			
事前・事後学修留意事項	地域支援の経験を有することが望ましい。		
研究室	1号館 古井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSS01-1E	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	認知リハビリテーション学概論	担当教員 E-Mail	武田 雅俊		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	認知リハビリテーション学は、未だ社会的に十分には浸透していない学問領域であるが、①脳機能改善を目指したリハビリテーション、②認知症の人に対するリハビリテーション、③ 認知機能改善を介した行動変容の三領域をカバーしている。認知機能および認知機能障害の生理機能や病理病態を理解したうえで、リハビリテーションの生理学的機序、リハビリテーションの評価、リハビリテーション技術の改善などに結び付ける新しい学問領域について学修する。本科目では、認知機能、認知症、認知行動療法についての最新知見についての論文を精読しながら、これからのリハビリテーション技法の開発につなげる試みについて学修する。				
到達目標	1. 認知機能と生活機能との関係を正しく理解することができる 2. 認知機能の生物学的基盤を理解することができる 3. 認知症の病態・症状・評価法を理解することができる 4. 認知行動療法と行動変容の機序を理解することができる 5. リハビリテーションの有効性を高めるための認知機能の役割を理解することができる 6. 認知機能改善を組み合わせた新しいリハビリテーション技法を考えることができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	認知リハビリテーション学概論 が目指しているもの	ヒトの生活全体における認知機能の重要性と リハビリテーションに期待される課題と目標 について学修する		武田 雅俊	
2	認知症診療医テキスト 1,2,3 章	脳の老化と認知症、および、認知症の予防と改 善への自助努力について理解する		武田 雅俊	
3	認知症診療医テキスト 4,5 章	認知症の鑑別と診断の実際について学修する		武田 雅俊	
4	認知症診療医テキスト 6,7 章	認知症のしんけいがどうによる鑑別診断と認 知症を来す代表的疾患について学修する		武田 雅俊	
5	認知症診療医テキスト 8,9 章	アルツハイマー病の薬物療法と BPSD への対 応について学修する		武田 雅俊	
6	認知症診療医テキスト 10, 11 章	認知症の身体合併症・神経症状とケアの体制に ついて学修する		武田 雅俊	
7	認知症診療医テキスト 12,13,14 章	認知症の人に対する外来、病院での対応の実際 と行動制限について学修する		武田 雅俊	
8	認知症診療医テキスト 15,16,17 章	認知症の人の意思能力、地域医療と介護保険制 度、社会福祉制度について学修する		武田 雅俊	
9	認知症診療医テキスト 18,19,20 章	認知症の人を支える地域ケア、社会生活支援、 について学修する		武田 雅俊	
10	認知症患者に対するリハビリテ ーション技法の考え方	認知症の人に対する有効なリハビリテーショ ンの戦略について学修する		中村 美砂	
11	精神療法・生活療法・薬物療法 とリハビリテーションの統合	認知症に対する精神療法・生活療法・薬物療 法をどのようにリハビリテーションとして 統合するかを学修する		中村 美砂	

12	認知行動療法・メタ認知トレーニング	認知行動療法およびメタ認知トレーニングの技法を学修する	中村 美砂	
13	脳刺激法・ニューロモデュレーション	脳刺激法(ECT, rTMS, DBS)の方法とニューロモデュレーションのリハビリテーションへ適応について学修する	中村 美砂	
14	薬物療法のリハビリテーションへの応用	幻覚誘発剤(LSD, シロシビン)、ケタミンなど中枢作用薬物のリハビリテーションにおける応用ついて学修する	中村 美砂	
15	リハビリテーションの新しい技術	将来的な認知リハビリテーションの技法を学修する	中村 美砂	
成績評価方法		各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	日本精神神経学会	認知症診療医テキスト	新興医学出版	2019
	日本精神神経学会	認知症診療医テキスト 2 症例と Q&A	新興医学出版	2021
参考文献	S.ティミラス、武田雅俊、大内尉義	老化の生命科学 -分子から生理へ、そして臨床へ	アークメディア出版	2007
事前・事後学修留意事項	日本製審神経学会による認知症診療医テキスト 1 と 2 を教科書と参考書として使用するので、事前に各自読んでいてほしい			
研究室	1 号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSS02-1E	授業形態	講義	開講年次	2 年次
授業科目名	認知リハビリテーション学 研究方法論	担当教員 E-Mail	中村 美砂		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	認知リハビリテーション学研究の意義や目的を理解することを目指し、研究の段階的なプロセス（研究課題の発見、研究デザインと研究方法の決定、データの分析、研究結果の解釈と考察）における基本事項をまず理解する。研究目的を達成するためには、その目的に合った適切な研究方法を用いることが大切である。「認知リハビリテーション学」は広範な領域を網羅しており、それゆえその研究方法も多様である。本科目では、生物学的、心理学的、社会学的、教育学的観点から、それぞれの研究手法について知識を深める。併せて、研究者として備えるべき倫理観を醸成し、遵守すべき規範を修得する。				
到達目標	1. 研究の過程について理解することができる 2. 文献・情報の蒐集を行うことができる 3. 問題解決に最適な研究方法について理解できる 4. 研究内容の発表方法を理解できる 5. 研究者としての倫理規範を遵守することができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	認知リハビリテーション学研究 方法論序論	研究の意義と概念について学ぶ。		中村 美砂	
2	研究の理論的枠組みと仮説	科学的思考と研究過程について学ぶ。		中村 美砂	
3	研究計画の立案、計画書作成	研究計画書の作成方法について学ぶ。		中村 美砂	
4	研究の倫理規範	研究者としての態度、研究倫理を学ぶ。		中村 美砂	
5	データの分析方法と図表の作成	データの解析方法と表示方法について学ぶ。		中村 美砂	
6	ヒトを対象とした研究 (1)	認知機能検査について学ぶ。		中村 美砂	
7	ヒトを対象とした研究 (2)	アンケート調査の方法について学ぶ。		中村 美砂	
8	ヒトを対象とした研究 (3)	観察研究について学ぶ。		中村 美砂	
9	ヒトを対象とした研究 (4)	介入研究について学ぶ。		中村 美砂	
10	動物を対象とした研究	動物を対象とした研究の意義と実際について学ぶ。		中村 美砂	
11	細胞系を用いた研究	細胞系を用いた研究の意義と実際について学ぶ。		中村 美砂	
12	文献の活用方法	文献・資料の検索、蒐集、利用方法を学ぶ。		中村 美砂	
13	研究成果のまとめと論文文化	研究論文の書式、作成方法について学ぶ。		中村 美砂	
14	学会発表と論文投稿	学会発表と論文投稿の方法について学ぶ。		中村 美砂	

15	総括	以上のまとめと振り返りを行う。			中村 美砂
成績評価方法	筆記試験(50%)・レポート(50%)で評価する。				
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年	
	各講義でオリジナル資料を配付する				
参考文献	神里彩子、武藤香織	医学・生命科学の研究倫理ハンドブック	東京大学出版会	2015	
	出村 慎一 他	健康・スポーツ科学のための卒業論文/修士論文の書き方	杏林書院	2015	
事前・事後学修留意事項	特になし				
研究室	1号館 中村研究室		オフィスアワー	水曜日 12:00-13:00	

科目No.	MSS04-1E	授業形態	演習	開講年次	2 年次
授業科目名	リハビリテーション教育学 演習	担当教員 E-Mail	古井 透		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	この不確かな時代において、リハビリテーションの目指すところは、その途中に様々な過程があっても、究極的にはインクルーシブで持続可能な世界を実現することであろう。実際には、リハビリテーション医療にかかわる医師、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士などが、当事者を中心としたチームとして共通目的に向かっていくプロセスが展開されることになる。しかし、様々な立場の人々が問題意識を共有していく過程で、リハビリテーション教育学特論で学んだ教育学的諸技法や学際的視点によって、問題構造を解明し深化させることが有用となる。 本科目は、大学院生が持参する臨床現場の再認識から始める。リハビリテーション専門職の卒前・卒後の教育の一貫性を志向し、現場での多職種連携の深化へ向け、職種の違いを踏まえながら確かな裏付けを獲得していく過程を、多彩なバックグラウンドの講師陣のガイドで演習する。				
到達目標	1. 臨床現場で望ましい専門的スキルの到達目標について想起できる 2. 臨床現場で求められるノンスキルテクニカルスキルについて説明できる 3. リハビリテーション専門職の卒前・卒後のあるべき教育体系を描出できる 4. 協働的関係の構築による多職種連携を模擬実施できる 5. 臨床現場での療法士の当事者研究を志向できる 6. 本学が果たすべき役割について自説を表出できる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	問題意識確認	アイスブレイクと各受講生の自己紹介により、個別の問題意識の背景を探索する。		古井 透	
2	臨床現場の現状把握	各人の活動環境における専門的スキル・ノンスキルテクニカルスキルの到達現状をインタラクティブに突き詰めていく。		古井 透	
3	臨床教育の体系	各人の領域におけるリハビリテーション専門職の卒前・卒後の教育体系がどうなれば一貫した体系となるのか議論を深める。		岡田 守弘	
4	医学教育の体系	医学教育における卒後トレーニングの各領域での実情を吟味する。		岡田 守弘	
5	事例研究方法論	困難事例におけるケース会議の設定の仕方、会議の持ち方についてのコーチングを学ぶ。		岡田 守弘	
6	連携と協働	多職種連携をロールプレイによって演習し、協働的関係の構築をシュミレーションする。		大嶋 伸雄	
7	理学療法教育 UP TO DATE	理学療法における技術水準の新評価軸や到達目標への機能団体の取り組みを学ぶ。		峰久 京子	
8	作業療法教育 UP TO DATE	多職種連携の模擬ロールプレイ演習を実施し、協働的関係性をシュミレーションする。		大嶋 伸雄	
9	言語聴覚教育 UP TO DATE	言語聴覚療法領域の技術水準の評価軸や到達目標への機能団体の取り組みを学ぶ。		塚本 能三	
10	臨床現場との乖離	各人の活動環境における卒前教育レベル・卒後教育レベルの水準について、各専門職機能団体が目指している目標と比較し記録することを		古井 透・中松 俊介	

		学ぶ。		
11	課題吟味	現状と目標の間を埋めるのに必要な要素を列挙し、優先順位を明確にしながら洗い出す。	古井 透・中松 俊介	
12	改善計画立案	現状と目標の間を埋めるための第一段階の計画を立案する。	古井 透・中松 俊介	
13	改善計画発表	各受講生の環境における改善策の発表の資料を吟味する。	古井 透・中松 俊介	
14	当事者研究を知る	各受講生の環境における改善策を発表し質疑によりブラッシュアップする。その際、療法士の当事者研究という視座を学ぶ。	古井 透・中松 俊介	
15	資源開発と条件整備	各受講生の環境における改善策が継続的に実現可能にするための社会資源を検討し、本学が果たすべき役割を議論してまとめる。	古井 透・中松 俊介	
成績評価方法		成果物の発表内容(50%)および演習への取組内容(50%)によって総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	ティム・スレイド, 足立美穂	オンデマンド・ラーニング	日本能率協会マネジメントセンター	2021
参考文献	鈴木 克明, 市川 尚, 根本 淳子	インストラクショナルデザインの道具箱 101	北大路書房	2016
	中村 文子, ボブ・パイク	研修デザインハンドブック	日本能率協会マネジメントセンター	2018
事前・事後学修留意事項	予め教科書を通読しておくこと			
研究室	1号館 古井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSS05-1E	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	地域社会福祉制度特論	担当教員 E-Mail	野村 和樹		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	本講義においては、まずはオンデマンドで情報を提供し、受講生はそのテーマに沿った、20 分程度のパワーポイントによる発表を次回に行い、その後ディスカッションを行う。このような授業形態をとることで理解を深め、テーマにそって持論を展開できるように進めたい。 ある事象が社会問題として取り上げられ、それが人間の尊厳を脅かしたり、あるいは健康で文化的な最低限度の生活を営むための基本的要求が充たされない事態に陥るときに、それらへの支援の施策が設けられる。 社会福祉における施策を実施するためには、まず根拠となる法律が制定され、その法律に基づき支援が実施される。社会問題として取り上げられるのであるから、当然のことながら社会情勢が反映される。 社会情勢と立法の関わりも含め、これまでに制定された様々な法律の制定過程を理解し、後半では、今日の地域における支援の形態とその根拠となる法律に着目して学修を進めたい。 また、社会福祉の制度にのっとり地域で展開される支援を地域社会福祉の制度とし、社会福祉の施策に基づく支援により、基本的要求が充たされ尊厳の回復、健康で文化的な生活を取り戻すことも、社会的なリハビリテーションと捉えた学修を展開する。				
到達目標	1. 社会の背景が法律制定に及ぼす影響が理解できる 2. 権利に関わる国際法が制定された過程を理解ができる 3. 法律を根拠とした支援ならびに制度が理解できる 4. 制度を根拠とし、個々に応じた支援計画が立案できる 5. 事例を通して社会的リハビリテーションが理解できる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	児童福祉以前の児童に関わる法律 I	1802 年に制定された『徒弟の健康と道徳に関する法』と 1889 年にイギリスにおいて制定された『児童虐待防止法』から立法と社会情勢の関りを学ぶ		野村 和樹	
2	児童福祉以前の児童に関わる法律 II	発表とディスカッション		野村 和樹	
3	『児童福祉法』 I	今日の日本における社会福祉のはじまりともいえる『児童福祉法』の成立過程について学ぶ		野村 和樹	
4	『児童福祉法』 II	発表とディスカッション		野村 和樹	
5	『身体障害者福祉法』 I	『身体障害者福祉法』の成立過程について学ぶ		野村 和樹	
6	『身体障害者福祉法』 II	発表とディスカッション		野村 和樹	
7	『知的障害者福祉法』 I	『知的障害者福祉法』の成立過程について学ぶ		野村 和樹	
8	『知的障害者福祉法』 II	発表とディスカッション		野村 和樹	

9	『児童虐待の防止等に関する法律』と制度施策Ⅰ	『児童虐待防止法』から児童虐待の定義を理解し、児童虐待について学ぶ	野村 和樹
10	『児童虐待の防止等に関する法律』と制度施策Ⅱ	発表とディスカッション	野村 和樹
11	障害者基本法と障害者総合支援法Ⅰ	今日の障害者福祉の支援について学ぶ	野村 和樹
12	障害者基本法と障害者総合支援法Ⅰ	発表とディスカッション	野村 和樹
13	児童虐待予防のための包括的な支援Ⅰ	子育て世代包括支援センターと子ども子育て支援法に定められている「利用者支援事業」との関係を理解し、健やかな育ちの環境を学ぶ	野村 和樹
14	児童虐待予防のための包括的な支援Ⅱ	発表とディスカッション	野村 和樹
15	総括	各回の講義を振り返ることで、法律を根拠とした支援の関係を学ぶ	野村 和樹
成績評価方法	発表の内容とディスカッション		
教科書	著者	タイトル	出版社
	授業内で適宜レジュメ、資料を配布		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
事前・事後学修 留意事項	配付された資料をクリティークし、知識の集積を行い、自分の考えをまとめる。		
研究室	1号館 野村研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSS06-1E	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	地域ケアマネジメント特論	担当教員 E-Mail	古井 透		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超越、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と社会資源が世代・分野を超えつながることで、生きがいある暮らしの実現をめざし「地域共生社会」が提案された。生活困窮者、障がい者、子どもなど多様な人々を視野に入れた 2040 年を展望し「地域共生社会」の実現にむけ、高齢者ケア分野で培ってきた介護保険・地域ケアの考え方やその前提となる「システム」「仕組み」を概観しておく必要がある。 本科目では、介護支援分野、保健医療サービス分野、さらに福祉サービス分野の制度理解を通じて、医療資格獲得後 5 年の経験者が介護支援専門員実務者研修受講試験に合格できる程度の背景知識を提供する。 講座の終盤 3 コマで、国内外の福祉に高い見識をお持ちの厚生行政で経験豊富な外部講師を招き、ケアマネジメントの源流に立ち返りながら、わが国における高齢者在宅福祉の展開と介護保険制度の創設の歴史を踏まえ、地域ケアの未来の課題などについて、深掘りしていただく予定である。				
到達目標	1. ケアマネジメント実践のための背景が理解できる 2. ケアマネジメント実践のための評価方法・マネジメントプロセスが理解できる。 3. 地域共生社会に対応できるケアマネジメントについて理解できる 4. 介護支援専門員実務者研修受講試験に合格できる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	介護保険制度の概略 保険者と被保険者	介護保険の保険者と被保険者について学ぶ。 p 16-35		古井 透	
2	要介護認定と保険給付	要介護認定から支給限度額から介護保険にでてくる会議までを学ぶ。 p 36-45		古井 透	
3	介護保険給付と介護保険計画	介護保険給付やサービスの実際や介護保険計画について学ぶ。 p 46-61		古井 透	
4	介護保険財政と地域支援事業	介護保険制度の財源や介護予防について学ぶ。 p 62-85		古井 透	
5	ケアマネジメント	ソーシャルワークとケアマネジメントの構成要素と機能について学ぶ。 p 86-109		古井 透	
6	在宅医療とバイタル・検査	在宅医療管理と検査値、介護保険におけるケアマネジメントの方法と過程について学ぶ。 p 128-147		古井 透	
7	高齢者に多い疾患	高齢者に多い疾患の特徴と、各疾患の概略について学ぶ。 p 148-169		古井 透	
8	感染症や認知症などへの対応	感染症や認知症などについて、その介護技術や対応に役立つ知識について学ぶ。 p 168-191		古井 透	
9	居宅サービス	居宅サービスの基準や各事業の概要について学ぶ。 p 208-231		古井 透	
10	施設・地域密着宅サービス	施設サービスの種類や運営基準、地域密着サービスの種類や基準を学ぶ。 p 232-247		古井 透	
11	ケアマネジャー介護保険法以外の法制度	介護保険法以外のさまざまな制度、法律について学ぶ。 p 248-265		古井 透	

12	介護支援専門員実務者研修受講試験に備える	介護支援分野 20 問、保健医療分野 20 問、福祉分野 20 問のケアマネ試験予想問題に取り組む	古井 透	
13	ケアマネジメントの定義と歴史（アメリカ・イギリス）	ケアマネジメントの定義と成り立ちについて歴史的背景より学ぶ	村川 浩一	
14	わが国における在宅福祉の展開とケアマネジメントの導入	わが国における高齢者在宅福祉の展開と介護保険制度の創設・意義について学ぶ。	村川 浩一	
15	総括	地域共生社会に対応できるケアマネジメントについてのまとめとフィードバックを行う。	村川 浩一	
成績評価方法		13 回以降の各コマの講義内容の理解度(30%)、1-12 回の授業ごとの小テスト(70%)の合計で評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	馬淵敦士	この 1 冊で合格 馬淵敦士のケアマネテキスト&問題集	KADOKAWA	2023 年
参考文献	馬淵敦士	ゼロからスタート！馬淵敦士のケアマネ 1 冊目の教科書	KADOKAWA	2023 年
	中央法規ケアマネジャー受験対策研究会	ケアマネジャー試験ワークブック 2024	中央法規	2024 年
	介護支援専門員テキスト編集委員会	介護支援専門員基本テキスト 上巻・下巻	長寿社会開発センター	令和 3 年
	晶文社編集部	ケアマネジャー合格テキスト ‘24	晶文社	2024 年
事前・事後学修留意事項	毎回の授業範囲を予習し、積極的に参加できるよう準備してください。とりわけケアマネ研修受講試験合格を目指す人には、主体的取り組みを応援します。			
研究室	1 号館 古井研究室		オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSS07-1E	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	心のサイエンスと臨床心理学	担当教員 E-Mail	武田 雅俊・松尾 加代		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	ヒトは、外界からの刺激と情報を取り入れて、脳内に蓄えられた経験や知識と照らし合わせて自分の意識的な行動を決定するが、ヒトの行動には、意識的な行動だけでなく、疾病や性格や薬物などに影響された無意識的な行動もある。本科目では、ヒトの行動決定メカニズムについて理解するとともに、多くの人の行動が生物学的側面と心理学的側面から説明できることを学修し、いくつかの精神症状や心理学的現象の発症メカニズムについて学修することにより、脳と心の懸け橋としての臨床症状について、理解を深める。				
到達目標	1. 性格に基づく行動パターンの違いを理解できる 2. 脳内情報処理過程について理解する 3. 脳老化に伴う行動パターンや心理学的変化を理解する 4. ヒトの行動決定の様式を生物学的・心理学的に説明できる 5. 高齢者の心理・行動パターンを理解できる 6. メタ認知、歪・誤認知のメカニズムを知り、行動パターンを理解する				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	行動パターンと性格	ヒトの行動形式や行動パターンと性格との関係について学ぶ。		武田 雅俊	
2	脳が見ている世界	脳視覚野における視覚系情報処理の方法について説明し、錯視・幻視の機序を学ぶ。		武田 雅俊	
3	脳内報酬系と嗜癖・常同行動	ヒトが繰り返して行う行為行動について脳内報酬系の関与を学ぶ。		武田 雅俊	
4	寿命と高齢者の行動パターン	高齢者に特徴的な行動パターンと認知機能との関係について学ぶ。		武田 雅俊	
5	高齢者の認知機能・軽度認知障害	加齢による脳老化と認知機能低下との関係について学ぶ。		武田 雅俊	
6	自動運転と人工知能(AI)	ヒト認知機能と人工知能(AI)との対比について自動運転を例にして学ぶ。		武田 雅俊	
7	脳科学は進歩したのか-この百年間の脳科学の進歩	百年間の脳科学の歴史を振り返りながら、ヒト脳機能の変化と将来について学ぶ。		武田 雅俊	
8	心理学から見た感覚・知覚	心理学領域で研究される感覚・知覚について学ぶ。		武田 雅俊	
9	社会的認知	社会的認知について概説した後、社会的認知の障害について学ぶ。		武田 雅俊	
10	メタ認知 (1)	メタ認知的知識について		松尾 加代	
11	メタ認知 (2)	メタ認知のモニタリング機能について		松尾 加代	
12	メタ認知 (3)	アウェアネスと自己知について		松尾 加代	
13	メタ認知 (4)	メタ認知的判断について		松尾 加代	

14	メタ認知（5）	メタ認知の発達について			松尾 加代
15	メタ認知（6）	メタ認知の神経科学的基盤について			松尾 加代
成績評価方法		各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年	
	武田雅俊、工藤喬	「心のサイエンス -精神医学の進む道-」	メディカルレビュー社	2006	
	武田雅俊、加藤敏、神庭重信	「Advanced Psychiatry-脳と心の精神医学-」	金芳堂	2007	
	清水寛之	メタ記憶 記憶のモニタリングとコントロール	北大路書房	2009	
参考文献					
事前・事後学修留意事項		特になし			
研究室	1号館 学長室	オフィスアワー	開講時に提示する		

科目No.	MSS08-1E	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	認知機能解析学	担当教員 E-Mail	大嶋 伸雄		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	認知機能の低下が持続すると脳の障害である認知症を呈する。認知症の病態は、分子生物学的手法を駆使し精神神経医学的に解析され、脳機能を支えるニューロンや神経伝達物質の動態など分子レベルで解明されつつある。「こころ」も分子や細胞の変化で説明しようと試みられている。認知症の発症機序さらに認知症に有効な予防やリハビリテーションを明らかにすることを目指して、本科目ではニューロンの性質・作用の理解を基盤とし、脳内でどのようなメカニズムで認知機能が遂行され、そしてどのような要因で破綻するか、最新の解析で得られたデータに基づき、分子から個体、基礎から臨床にわたり多角的に学修する。				
到達目標	1. ニューロンとその構成器官である脳の正常の構造と機能が理解できる。 2. 神経変性・細胞死・可塑性のメカニズムを理解し、認知機能低下の防御法について説明できる。 3. 認知機能を担う神経回路網の構造的機能的相関を理解し、認知症発症のメカニズムを説明できる。 4. BPSD（行動心理周辺症状）から認知機能の低下レベルを把握できる。 5. 言語・非言語コミュニケーションにより認知機能を考察できる。 6. 神経心理学的検査法により認知機能が解析できる。				
授業回数	テーマ	内容			担当教員
1	認知機能とはなにか	知・情・意の世界観から認知機能を紐解く			大嶋 伸雄
2	認知機能と認知症	認知機能の低下の要因と認知症発症のメカニズムについてその概略を理解する。			中村 美砂
3	神経変性及び神経細胞死のメカニズムの解析	神経変性・細胞死のメカニズムをミトコンドリア、オートファジー及びニューロフィラメント・タウタンパク質の機能障害から考察する。			中村 美砂
4	リハビリテーションによる神経可塑性・再生機序	運動、学修、食品の摂取などによるリハビリテーションや身体機能活性化によりニューロンの再生が可能か、最新の文献検索も取り入れ考察する。			中村 美砂洋
5	神経伝達物質・受容体と認知機能との関係	シナプスでの情報伝達の破綻がどのように認知症を引き起こすか、神経伝達物質と受容体の動態と認知機能の変化の関係を考察する。			中村 美砂
6	認知機能を担う神経回路網Ⅰ：大脳皮質	認知機能の中核である大脳皮質の各葉の構成を理解し、種々の感覚情報がどのような回路網で処理され行動として発現されるかを学び、各部位の障害と認知症との関係を考察する。			大竈 友博
7	認知機能を担う神経回路網Ⅱ：大脳辺縁系と大脳基底核	記憶や情動に関わる大脳辺縁系と円滑な運動を遂行する大脳基底核は認知機能に必須であり、これらの部位の障害に特有の認知症について学ぶ。			大竈 友博
8	大脳皮質、辺縁系、基底核、視床の機能的・構造的相関と認知症発	認知機能を担う脳の各部位の相互的連結による作用を総括的に理解し、認知症発症のメカニズムを			大竈 友博

	症メカニズム	分子・細胞レベルで考察し、認知症の予防法を検討する。	
9	脳内微小循環の破綻と認知症発症のメカニズムと画像診断	血流の変化、炎症、アミロイドβの沈着などによる細胞外環境の異常や細胞外液（髄液）の循環障害による神経細胞死からの認知症発症機構について画像診断法も併用し考察する。	大竈 友博
10	中核症状と BPSD（行動心理周辺症状）からみた認知機能	認知症の中核症状及び、行動心理周辺症状：BPSDを理解し、認知機能症状を捉える視点を学ぶ。	大嶋 伸雄
11	行動指標によるプレクリニカルな評価及び認知症ケア	日常活動の行動指標を用いて、認知症の前段階（プレクリニカル）の症状を評価することにより認知症ケアの要点を理解する。	大嶋 伸雄
12	電気生理学（脳波）を用いた軽度認知症の鑑別	聴性誘発事象関連電位を用いたオッドボール課題による脳の反応を検出することで、早期の軽度認知症の重症度を判定する評価法を学ぶ。	大嶋 伸雄
13	言語・非言語コミュニケーションと認知機能	言葉のみの使用による言語コミュニケーションと身振りや話し方など言葉以外のやり取りである非言語コミュニケーションの比較から認知機能を解析する方法を学ぶ。	高橋 泰子
14	神経心理学的検査による認知機能の解析	WAIS（知能検査）や注意障害の有無や程度を把握するCAT（標準注意検査法）などの神経心理学的検査法を用いて測定をシミュレーションする。	高橋 泰子
15	認知機能の解析と対応	測定した WAIS（知能検査）や CAT（標準注意検査法）などの神経心理学的検査結果から、認知機能を解析し、考察する。	高橋 泰子
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社
参考文献	寺島俊雄	神経解剖学講義ノート	金芳堂
	医療情報科学研究所	病気がみえる vol.7 脳・神経	MEDIC MEDIA
事前・事後学修留意事項	特になし		
研究室	1号館 大嶋研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSS09-1E	授業形態	講義	開講年次	2 年次
授業科目名	運動機能解析学	担当教員 E-Mail	古井 透		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	共通科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	歩行、書字、嚥下など、身体運動の回復はリハビリテーションにおける重要な課題である。身体運動の遂行には、筋力・柔軟性・バランス・持久力といった運動機能が不可欠であるが、その他、解剖学的構造、呼吸循環機能、神経機能など様々な要素が関与している。そのため、身体運動は、運動学、力学、生理学などの多様な手法により、多面的に解析されている。本科目は、運動機能に加え、広く、身体の姿勢・運動を解析する手法を紹介し、それらの原理やリハビリテーションにおける具体的な先行研究を学修することで、研究実践力を修得する。				
到達目標	1. (古井) 運動機能を多面的に分析する手法が説明できる。 2. (久利) 足圧中心 (COP ; center of pressure) を用いた解析の種類と解釈について説明できる。 3. (肥田) デジタルカメラなどの汎用機器を用いた姿勢・動作解析の方法について説明できる。 4. (今井) ジャンプマットセンサーを用いて運動機能との関連性、意義や方法を計測できる 5. (佐伯) 超音波撮像装置を用いた骨格筋の形態・機械的特性の評価について、意義や方法を説明できる。 6. (岡) 動作解析における 3 次元動作計測の概要と意義を説明できる。 7. (岡) 歩行解析における床反力計測の概要と意義を説明できる。 8. (村西) 加速度計を用いた姿勢・動作解析の計測方法と解釈を説明できる。 9. (村西) 筋電図を用いた解析手法を説明でき、筋電図による種々の姿勢・動作解析を説明できる。 10. (村上) 活動量計を用いた身体活動量の測定方法とその解釈について説明できる。 11. (村上) スパイロメーターを用いた呼吸機能検査の方法とその解釈について説明できる。 12. (久利) 超音波画像診断装置から得られるデータを用いた解析の種類と解釈について説明できる。 13. (大籠) 脳の解剖学的構造と機能・機能分析のためのイメージング技術について説明できる。 14. (今井) 感圧センサーを用いた評価方法と解釈を説明できる。 15. (畑中) 発達障害の運動機能評価法の手法やデータの解釈について説明できる。				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	総論	運動機能を解析する手法を概観する。		古井 透	
2	重心動揺計測による姿勢・動作解析学	COP を用いた解析について学ぶ。		久利 彩子	
3	2 次元姿勢解析による姿勢・動作解析学	比較的安価に入手可能な測定機器を応用した姿勢・動作解析手法について学ぶ。		肥田 光正	
4	ジャンプマットセンサーを用いた運動機能の解析	ジャンプマットを用いて、運動機能を適切に評価し、その特徴や意義、方法について学ぶ。		今井 亮太	
5	超音波撮像装置を用いた骨格筋の形態・機械的特性の評価	超音波撮像装置を用いることで可能な骨格筋の形態・機械的特性の評価について、それぞれの意義や方法を学ぶ。		佐伯 純弥	
6	3 次元動作解析による姿勢・動作解析学	3 次元動作解析とその姿勢・運動解析への応用について、先行研究を通して学ぶ。		岡 健司	

7	床反力計測による姿勢・動作解析学	床反力計を用いた歩行計測・解析手法について、先行研究を通して学ぶ。	岡 健司	
8	加速度計測による姿勢・動作解析学	加速度計の計測方法および先行研究を通じた姿勢・運動解析を学ぶ。	村西 壽祥	
9	筋電図測定による運動解析学	筋電図を用いた計測方法および解析手法を学び、先行研究を通じた姿勢・運動解析を学ぶ	村西 壽祥	
10	活動量計による身体活動量の測定	ウェアラブル機器である活動量計を用いた身体活動量の測定の実際とデータの解釈方法について学ぶ。	村上 達典	
11	スパイロメーターによる呼吸機能の評価	スパイロメーターを用いた呼吸機能検査の実際とデータの解釈方法について学ぶ。	村上 達典	
12	超音波エコー検査による運動解析学	運動に伴う組織変動をリアルタイムに観察できる超音波画像診断装置を用いた解析について学ぶ。	久利 彩子	
13	脳機能計測 (fNIRS・PET 等)による脳機能解析学	大脳の機能分類の基礎を解説するとともに、神経科学論文を紹介して最新の脳機能計測方法について疾患を交えながら学修する。	大箆 友博	
14	感圧センサーを用いた運動解析	基礎から臨床まで様々な測定方法について従来から現在に至るまでの方法を、それぞれの解析手段の変遷を学修する。	今井 亮太	
15	発達障害の運動機能評価法	運動機能の特異的発達障害の運動機能評価を使用した先行研究を紹介し、運動機能の特異的発達障害の運動機能評価手法について学ぶ。	畑中 良太	
成績評価方法		各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	配布資料			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	事前に理学療法に関する運動機能評価に関する文献を検索する。事後は自身の修士論文に関する研究方法に応用するためにより深く理解する。			
研究室	1号館5階 第20研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSS10-1E	授業形態	講義	開講年次	2 年次
授業科目名	生活行為解析学	担当教員 E-Mail	上島 健		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	人が生きていく上で営める生活全般の行為(生活行為)は、心身機能の障害によって日常生活活動、家事、仕事、趣味、遊び、対人交流、休養等に支障をきたす。生活行為を阻害している因子を科学的に分析し、作業療法が「人は作業を通して健康や幸福になる」という基本理念と学術的根拠に基づき、作業療法を通して認知予備力を高められるアイデアを創発し、その支援策を地域で検証する。本科目では、身体障害、精神障害、発達期障害、高齢期障害による阻害因子を国際生活機能分類(ICF)の概念に基づく相互作用から生活行為を分析する能力を学修する。				
到達目標	1. 作業療法の基本となる「作業」についての作業分析ができる 2. 心身機能の障害による日常生活活動の課題を説明することができる 3. 日常生活活動の課題と生活行為との因果関係を説明することができる 4. 生活行為を阻害している因子について、客観的な指標を用いて説明することができる 5. 作業療法を通して認知予備力を高められるアイデアを創発することができる 6. 障害領域における主な生活行為の阻害因子と国際生活機能分類(ICF)と関連付けができる				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	生活行為向上マネジメントのプロセス概要 1	生活行為を向上するためのリハビリテーション評価とアウトカムを学修する。		上島 健	
2	生活行為向上マネジメントのプロセス概要 2	作業療法の基本となる「作業」における作業分析を学修する。		上島 健	
3	生活行為分析のインテーク	本人や家族への聞き取りから、生活行為の目標設定を学修する。		武井 麻喜	
4	生活行為分析のアセスメント	基本情報の分析、ICF に基づく分析や予後予測、本人や家族との合意形成を学修する。		武井 麻喜	
5	解決すべき課題の抽出と設定 1	現状とそのギャップの把握を学修する。		武井 麻喜	
6	解決すべき課題の抽出と設定 2	課題の優先順位付けを学修する。		武井 麻喜	
7	解決すべき課題の抽出と設定 3	課題の根本原因の分析を学修する。		水野 貴子	
8	生活行為支援のプランニング 1	支援プログラムの立案を学修する。		水野 貴子	
9	生活行為支援のプランニング 2	本人・家族・支援者の役割を学修する。		水野 貴子	
10	生活行為支援の実際 1	支援プログラムの実行 (身体障害領域)		水野 貴子	
11	生活行為支援の実際 2	支援プログラムの実行 (高齢期領域)		上島 健	
12	生活行為支援の実際 3	支援プログラムの実行 (精神・発達領域)		武井 麻喜	
13	生活行為支援策のモニタリング	再評価、目標達成状況の確認		武井 麻喜	
14	生活行為支援策の計画修正	未達成課題の要因分析、支援計画の修正、支援の引継ぎ・多職種への受け渡しを学修する。		武井 麻喜	

15	総括	総括	上島 健
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。		
参考文献			
事前・事後学修 留意事項	これまでの臨床経験に基づいたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目である。授業時間外の学修も含まれる。		
研究室	1号館 上島研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSS11-1E	授業形態	講義	開講年次	2 年次
授業科目名	コミュニケーション解析学	担当教員 E-Mail	塚本 能三		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	コミュニケーションはヒトが社会で生活していく上で必要不可欠なものである。コミュニケーションには言語的コミュニケーション、および非言語的コミュニケーションがある。いずれも、社会生活上重要なコミュニケーション手段である。一方、これらの能力の障害が脳損傷により生じる。ここでは、成人分野における健常者のコミュニケーション能力を解析し、さらに、脳損傷によって生じる、コミュニケーション障害を分類、具体的な障害について解説を加え、コミュニケーション障害の実態を把握することを本講義の主目的とし、さらにリハビリテーションの可能性について学ぶ。				
到達目標	1. 言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーションの役割について理解する。 2. 脳血管障害によるコミュニケーション障害の病態について理解する。 3. 対象となる聴覚障害者（児）のコミュニケーションの問題について、分析し、把握ができる。 3. 言語コミュニケーションのデータ収集・分析方法を理解することができる。 4. 運動障害性構音障害について、JIN 式発声発語・器官検査を参考にした評価・訓練プログラムの立案ができる。				
授業回数	テーマ	内容			担当教員
1	関係発達論的視点からのコミュニケーション発達について	関係発達論とは何かを主に個体能力発達論との相違点を通じて理解する。			塚本 能三
2	質的研究の方法論としてのエピソード記述について	人と人の接面で生じるコミュニケーションを記述する方法としてエピソード記述法を理解する。			塚本 能三
3	原初的コミュニケーションについて	コミュニケーション発達の基盤となる乳幼児期の原初的コミュニケーションを理解する。			塚本 能三
4	語用論的視点からのコミュニケーション発達について	主に前言語期のコミュニケーション発達を語用論的視点から理解する。			塚本 能三
5	聴覚障害者（児）とコミュニケーション	聴覚障害者（児）のコミュニケーションについて、コミュニケーション方法の視点から検討する。			馬屋原 邦博
6	脳損傷によって生じる言語・コミュニケーション障害について	脳損傷によって生じる様々なコミュニケーション障害とその特徴について理解する。			上田 有紀人
7	要素的言語症候と病巣局在について	脳損傷によって生じる要素的言語症候と局在について理解する。			上田 有紀人
8	認知神経心理学的アプローチについて	単語情報処理モデルを用いて、情報処理過程と誤りの分析、訓練法について理解する。			上田 有紀人
9	言語コミュニケーションについて（会話分析1）	健常者の会話分析のデータ収集方法を理解する			芦塚 あおい
10	言語コミュニケーションについて（会話分析2）	健常者の会話分析のデータ分析方法を理解する			芦塚 あおい
11	言語障害のコミュニケーションの分析と解析1	言語音レベルから会話レベルまでの言語コミュニケーション障害のデータ収集方法演習			芦塚 あおい
12	言語障害のコミュニケーションの分析と解析2	言語音レベルから会話レベルまでの言語コミュニケーション障害のデータ分析方法演習			芦塚 あおい
13	コミュニケーションにおける音	人間にとって自然な言語獲得とは何かを考え、後天			和田 英嗣

	声言語の役割について	的な言語障害について解説する。	
14	JIN 式発声発語・器官検査の目的と使用方法について	新たに考案された運動障害性構音障害の検査について解説する。	和田 英嗣
15	症例検討（中心問題を評価した上で、最適な訓練を考察する）	事例を提示し、JIN 式発声発語検査を用いた評価・訓練について解説し検討する。	和田 英嗣
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社
	藤田郁代 監修	「失語症学」第3版	医学書院
参考文献	藤田郁代	「言語聴覚障害学概論」第2版	医学書院
事前・事後学修 留意事項	各回の講義内容について教科書、参考文献その他を通じてあらかじめ概略を理解しておくこと。		
研究室	1号館 塚本研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSS12-1E	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	園芸療法補完代替医療	担当教員 E-Mail	久利 彩子		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	リハビリテーション領域には、園芸療法、動物介在療法、音楽療法、芸術療法、スヌーズレン、内観療法など様々な療法が活用されている。これらの中にはエビデンスに乏しいものもあるが、リハビリテーション領域の多彩な活動を概説したあとに、代表的なものとして園芸療法を取り上げて学修する。 本科目の目標は、1.園芸療法の対象となる人の特性を考慮し、2.対象者の効果的な園芸療法を実施する場合の環境について考え、3.適切な園芸療法プログラムを立案するための心身機能を解析し、4.園芸療法介入および評価方法を学び、5.症例検討を行う力を育むことである。				
到達目標	1.様々な補完代替療法についての知識を得る。 2.園芸療法の目的を理解し、対象となる人の特性を考慮した選択ができる。 3.対象者にとって効果的な園芸療法を計画し、適切な園芸療法プログラムを実践できる。 4.園芸療法介入の評価を行うことができる。				
授業回数	テーマ	内容			担当教員
1～2	活動分析「育てる」① 土つくりと精神・身体・社会機能への影響	耕起動作と身体へのストレス、作業高さと身体への影響、土の種類・加水による（感覚入力の違いによる）筋緊張への影響、障害別の効果について学修する。			久利 彩子
3～4	活動分析「育てる」② 種まき・球根・苗の定植と精神・身体・社会機能への影響	移植ごとと上肢関節可動域、協調性と定植動作、障害別種まきの手法の区別と巧緻動作維持向上について学修する。			久利 彩子
5～6	活動分析「育てる」③ 水やり、間引きと精神・身体・社会機能への影響	水やりの道具によるヒト機能への影響、重量の違いとヒト機能への影響について学修し、つまみ動作の種類、はさみとヒト機能、障害別水やり、間引きの工夫などについて学ぶ。			久利 彩子
7～8	活動分析「育てる」④ 収穫、利活用と精神・身体・社会機能への影響	場面とヒト機能、障害別収穫、利活用のセス新身体機能への影響を学修する。			久利 彩子
9	園芸療法プログラムの臨床応用効果判定に必要な評価項目	園芸療法プログラムの臨床応用効果判定に必要な評価項目を学修する。			久利 彩子
10	身近な植物を使用する園芸療法プログラムの計画	身近な植物を使用する園芸療法プログラムの計画方法を学修する。			久利 彩子
11	身近な植物を使用する園芸療法プログラムの健常成人での実践と活動分析および実践環境の考察	園芸療法プログラムの健常成人での実践と活動分析および実践環境について学修する。			久利 彩子
12	園芸療法プログラムの臨床応用① 残存機能と園芸療法プログラム	計画と実践についてまとめて発表する。			久利 彩子
13	園芸療法プログラムの臨床応用② 残存機能と園芸療法プログラム	中間報告としてまとめる。			久利 彩子

14	園芸療法プログラムの臨床応用③ 残存機能と園芸療法プログラム	最終報告を発表する。			久利 彩子
15	まとめ	最終レジュメを提出し評価を受ける。			久利 彩子
成績評価方法		演習への取組内容および発表と最終レジュメにより評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年	
	必要に応じてオリジナル 資料を配布する				
参考文献					
事前・事後学修 留意事項		植物栽培、園芸について興味を持っていることが望ましい。			
研究室	1号館 久利研究室	オフィスアワー	開講時に提示する		

科目No.	MSS13-1E	授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	精神神経解剖学特論	担当教員 E-Mail	大 箆 友 博		
基本項目	科 目 区 分		単 位 数		履修期間
	支持科目		選 択	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	脳に存在するニューロンの数は 1000 億といわれる。このさらに 10 倍程度のグリア細胞が周囲を取り巻く極めて複雑な構造である。しかも異なる領域が多様な神経回路網を形成し、ニューロン同士の接続部（シナプス）の総数は 150 兆を超えるともいわれる。この神経回路網が記憶・認知・情動などを生み出す本質的な構造である。臨床神経解剖学特論では発生学・生理学・解剖学の視点を組み合わせながら、神経系の機能解剖学を想起する能力を培う。また正常構造・正常機能のみならず、臨床例をもとにした病理的機能も積極的に取り入れることで、神経系の構造と機能の理解を深める。また、適宜最新の研究論文をハイライトすることにより、新しい課題への対応能力を習得する。				
到達目標	1. 大脳皮質の基礎的な形態と機能について説明でき、関連疾患や研究について理解できる。 2. 脳神経の走行や投射形式・機能について説明でき、関連疾患や研究について理解できる。 3. 小脳の基礎的な形態と機能について説明でき、関連疾患や研究について理解できる。 4. 大脳基底核の形態と機能について説明でき、運動疾患と関連研究について理解できる。 5. 大脳辺縁系が担う機能について説明でき、関連疾患や研究について説明できる。				
授業回数	テーマ	内容		担当教員	
1	ニューロンとグリア細胞	神経系を構成する要素として、ニューロン、グリア細胞、シナプスの基本的な構造を解説する。また、関連する最新の神経科学研究について学修する。		大 箆 友 博	
2	大脳の局所解剖と血液供給	大脳皮質の発生と内部構造について解説する。また、関連する最新の神経科学研究について学修する。		大 箆 友 博	
3	優位半球と失語・失読・前頭葉機能障害	ブロードマン脳地図に基づく、大脳皮質の機能分類とその異常による疾患について学び、関連する最新の神経科学研究について学修する。		大 箆 友 博	
4	脳梁とその障害	脳の各領域を繋ぐ線維や、左右差をもとに高次情報処理機構について、疾患を交えながら学び、関連する最新の神経科学研究成果を学修する。		大 箆 友 博	
5	延髄と核上性、核性、核下性障害	延髄に出入りする脳神経の走行・投射経路と、神経核の障害について学修する。		大 箆 友 博	
6	前庭・蝸牛神経と関連疾患・伝音難聴・感音性難聴	橋下部に出入りする脳神経の走行・投射経路と、神経核の障害について学修する。		大 箆 友 博	
7	三叉神経と三叉神経痛・頭頸部関連通	橋上部に出入りする脳神経の走行・投射経路と、神経核の障害について解説する。		大 箆 友 博	
8	顔面神経とその障害	走行が複雑な顔面神経に焦点を当て、走行・投射経路と、神経核の障害について学修する。		大 箆 友 博	
9	視覚伝導路・眼球運動とその障害	眼球との関連性が深い脳神経に焦点を当て、走行・投射経路と、神経核の障害について学修する。		大 箆 友 博	

		る。	
10	小脳と小脳性認知情動症候群	小脳の構造と機能について、疾患を交えながら学び、関連する最新の神経科学研究成果を学修する。	大竈 友博
11	脳波と発作・ナルコレプシー	脳波の基礎と、神経機能異常に伴う異常脳波について学修する。	大竈 友博
12	大脳基底核とパーキンソン病	大脳基底核の構造と機能について、疾患を交えながら学び、関連する最新の神経科学研究を学修する。	大竈 友博
13	辺縁系と認知・情動	大脳辺縁系のうち海馬との関連性が深い領域に焦点を当て認知と情動の面から学修し、関連する最新の神経科学研究を学ぶ。	大竈 友博
14	辺縁系と依存・報酬	大脳辺縁系のうち側坐核や腹側被蓋野との関連性が深い領域に焦点を当て依存と報酬の関係性を学び、関連する最新の神経科学研究を学修する。	大竈 友博
15	まとめ	総括	大竈 友博
成績評価方法		教科書を基にした小テスト 30% レポート 70%の総合評価	
教科書	著者	タイトル	出版社
	井出千束	臨床神経解剖学	医歯薬出版株式会社
参考文献	寺島俊雄	神経解剖学講義ノート	金芳堂
事前・事後学修 留意事項	医療系大学・専門学校における解剖学を履修済みであることが望ましい。 事後に講義のレジュメをもとに復習をすること。		
研究室	1号館 大竈研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSM01-1R		授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	運動機能リハビリテーション学特論		担当教員 E-Mail	金尾 顕郎・峰久 京子・今岡 真和 岡 健司・肥田 光正・今井 亮太		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域		選択必修	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	健康寿命の延伸を阻害する重要な因子として、認知機能障害と運動機能障害が今日の健康課題となっている。近年、これらは互いに深く関連しており、領域横断的に二次予防の領域からのアプローチが展開されている。本科目では、老年症候群が将来の認知症発症リスクと密接に関わっていることから、運動器の視点から考える認知症予防の学術的基盤を養う。 また従来、リハビリテーション医療が担ってきた様々な疾病や要介護状態などの重症化予防と再発予防といった三次予防の観点から、成長期に見られる疾患の重度化予防、二次予防の領域よりスポーツ活動に付随する傷害の予防や就労者の腰痛問題、さらに地域における老年症候群の安全な暮らしのための施策策定に関わる研究など多角的に学び、臨床・研究における視点を学修する					
到達目標	1. 認知・運動機能の評価や治療の具体的な方略、研究手法について多面的な視点を学ぶ。 2. 加齢医学分野における老年症候群やフレイルについて理解し、予防策・改善策を実践できる。 3. 科学的知見から廃用症候群の予防法が論証できる。 4. 疼痛メカニズムの理解ができる。 5. 二次障害予防に必要な態度・関わり方・環境が例示できる 6. 支援技術を介して当事者イニシアティブを推進できる 7. 研究の意味を理解し、研究活動を習慣化し、倫理的配慮ができる。					
授業回数	テーマ		内容		担当教員	
1	老年症候群と認知・運動機能障害		老年症候群について理解し、予防理学療法学としてのポピュレーションアプローチとハイリスクアプローチを学ぶ		峰久 京子	
2	ライフステージ別にみた予防理学療法学のアプローチ		学童期における健康課題として近年問題となっている子どもロコモを取り上げ、運動器検診と事後措置としての地域包括ケアについて学ぶ。		峰久 京子	
3	フレイルの体系的理解とそのリスク		老年期の介護予防で重要なフレイルの視点を体系的にそのリスク要因などから学ぶ		今岡 真和	
4	ロコモ、骨粗鬆症など老年症候群の原因と評価方法を知る		加齢に伴う変性や脆弱性骨折など老年期の問題とその理学療法的視点における解決策を学修する		今岡 真和	
5	認知機能および認知症とそのリスク		平均寿命の延伸により社会問題化している「認知症」について、生理的メカニズムや理学療法的視点から予防策や社会実装策を学ぶ		今岡 真和	
6	直立姿勢保持と二足歩行遂行における体幹筋機能		直立姿勢と二足歩行保持における体幹筋の働きを比較生物学的に検討する		岡 健司	

7	腰痛症の原因と発生状況	腰痛症の原因と発生状況について、進化医学的観点を含め多角的に学ぶ	岡 健司	
8	デジタル機器や AI を用いた運動機能評価	近年急速に進歩しているデジタル画像処理技術や AI を用いた運動機能評価を学修する	肥田 光正	
9	疼痛学の基礎	疼痛の基礎について学修する	今井 亮太	
10	疼痛の評価	疼痛に関する評価について学ぶ	今井 亮太	
11	疼痛に対するリハビリテーション	疼痛に対するリハビリテーションを学ぶ	今井 亮太	
12	重力と運動制御	Klein-Vogelbach の 呈 する Functional Kinetics の観点から、運動制御機構を解説する。	金尾 顕郎	
13	予測的姿勢調節（APA）再考（synergy と strategy）	予測的姿勢調節（APA）を、運動の発現における随意性・非随意性を踏まえ、運動療法につなげる方法を考える。	金尾 顕郎	
14	運動における姿勢反応	神・経筋再教育における力学的考察と姿勢における神経機構について説明する。	金尾 顕郎	
15	総括およびフィードバック	まとめおよび総括を行う。	金尾 顕郎	
成績評価方法		各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	必要に応じて配布または指定する			
参考文献	適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	授業テーマに沿った専門書や文献に目を通し、配布資料をもとに復習してください。			
研究室	各担当教員 研究室	オフィスアワー	各担当教員 オフィスアワー	

科目No.	MSM02-1R		授業形態	演習	開講年次	1 年次
授業科目名	運動機能リハビリテーション学演習		担当教員 E-Mail	峰久 京子		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域		選択必修	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	運動機能リハビリテーション学特論で学んだことをベースに、最新の知見と既存の方法論を実施し学際的に学ぶことで、個々の研究の方法論及び介入法を発展させる。 文献レビュー・症例検討を行い、問題点や研究手法について討論する。また、専門的リハビリテーションの実践と研究としての評価や治療のあり方を学び、そして、予防の相やライフステージに応じた健康課題にフォーカスするための量的データや質的データの取り扱いを含めた包括的アセスメントのあり方や、課題の解決に向けたハイリスクアプローチとポピュレーションアプローチの方法を学ぶ。さらに、地域在住高齢者に対するフィールドワークに参加し、認知・運動機能の評価やリハビリテーションの実施計画、研究手法について多面的な視点を学ぶ。					
到達目標	1. リハビリテーション学領域における研究対象を理解し、説明できる 2. 研究に必要な理論と手法に関する基礎知識を身につけ、説明できる。 3. 自己のテーマに関する文献を選択して、批判的吟味を行い発表できる。 4. 地域在住者を対象に科学的な検査・測定ができ、老年症候群の種々の判定が適切に行える。 5. 認知・運動機能障害に関する評価、治療について概説できる。 6. 対象者に適切な疼痛の評価、治療が選択できる。 7. 障害とともに生きる人の生活機能の包括的評価ができる。 8. 支援技術を障害の社会的認知の改善に応用できる。					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1	研究の進め方と文献レビューについて	基本的な研究の流れと文献収集の方法、論文の批判的吟味について学ぶ。			峰久 京子	
2	研究デザインの基礎知識と倫理指針について	様々な研究デザインとガイドライン、倫理指針について学ぶ。			峰久 京子	
3	地域在住者におけるフレイルと理学療法アプローチ	フレイルの科学的評価方法を知るとともに、加齢医学分野のエビデンスから効果的な理学療法アプローチを体系的に学ぶ。			今岡 真和	
4	地域在住者におけるロコモ、骨粗鬆症と理学療法アプローチ	ロコモ、骨粗鬆症など老年症候群の科学的評価方法を知るとともに、加齢医学分野のエビデンスから効果的な理学療法アプローチを体系的に学ぶ。			今岡 真和	
5	地域在住者における MCI、認知症と理学療法アプローチ	地域在住者を認知機能の側面から評価、分析を行い、フィールドワーク（貝塚市内の地域在住者へ検査測定の実践）に参加し、研究の計画と実践について学ぶ。			今岡 真和	
6	下肢障害の発生機序	スポーツや交通事故などの外傷や関節変性による下肢障害の発生機序について学ぶ。			岡 健司	

7	下肢関節障害の運動機能評価	下肢関節障害の特徴を調査する関節制限歩行などの実験的手法を学ぶ。	岡 健司	
8	体幹の運動機能評価	体幹運動を捕捉するための運動学的・生理学的手法について学ぶ。	岡 健司	
9	疼痛学評価（急性疼痛，慢性疼痛）	急性疼痛，慢性疼痛の評価法，研究データの扱い方について学修する。	今井 亮太	
10	疼痛学評価（神経障害性疼痛，中枢性感作症候群）	神経障害性疼痛，中枢性感作症候群の評価法，研究データの扱い方について学修する。	今井 亮太	
11	疼痛学評価（地域高齢者，就労者）	地域高齢者，就労者が抱える疼痛の評価法，研究データの扱い方について学修する。	今井 亮太	
12	廃用性症候群に対する介入的評価	抗重力活動の促進を、どのように参加につなげたら、当事者のQOLが向上するのか、運動機能と認知機能にどのような影響があるのか、事例を通じて検討する。	古井 透	
13	障害とともに生きる人の生涯を見据えた生活機能の包括的評価	成人脳性麻痺者の二次障害による運動機能変化をライフヒストリーデータとGMFCSやCHRTで評価する方法を学ぶ。	古井 透	
14	認知・運動機能障害と支援技術	支援技術による移動を獲得していく過程で障害に対する社会的認知が変わっていく過程を、事例を通じて学ぶ。	古井 透	
15	総括およびフィードバック	各院生がテーマとする論文あるいは症例についてプレゼンテーションし、グループ討論を行う。全体のまとめと総括を行う。	峰久 京子	
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する			
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	必要に応じて配布または指定する			
参考文献	適宜紹介する			
事前・事後学修留意事項	興味のある研究論文を選び、A4 レジュメ 2 枚程度にまとめて発表の準備を行う。研究論文はできるだけ最新のものを選択してください。			
研究室	1 号館 酒井研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSM03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2 年次
授業科目名	運動機能科学特別研究		担当教員 E-Mail	指導教員		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	運動機能科学領域		選択必修	8 単位	通年（120h）
授業概要	リハビリテーション疫学・統計学特論、運動機能リハビリテーション学特論・演習その他認知機能と運動科学関連領域の授業で学んだ認知機能と運動機能科学についての知識を集大成するとともに疑問点を明確化し、一つの課題に取り組む。課題解決のためのスキルや用法について、担当教員の指導の下、自主的に学ぶ。さらに研究成果を研究会、学会などで発表するための表現法、プレゼンテーション法および論文の書き方を修得する。 地域在住高齢者のフレイル・サルコペニア調査、地域高齢者の要支援・要介護リスク因子の検討、骨粗鬆症 1 次予防に向けたリエゾンサービスの構築、地域社会再生を取り上げ地域の人的リソースの活用方法に関する検討、軽度認知機能障害（MCI）改善プログラムの開発、ロコモティブシンドロームの関連要因についての横断調査について研究・論文作成を行う。					
到達目標	1. 認知機能と運動機能科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知科学と運動機能科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1～3	研究課題の決定	認知・運動機能科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			指導教員	
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			指導教員	
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			指導教員	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			指導教員	
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			指導教員	
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			指導教員	
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			指導教員	
22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。			指導教員	

29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。		指導教員
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。		指導教員
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。		指導教員
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。		指導教員
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。		指導教員
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。		指導教員
成績評価方法		研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。			
参考文献				
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。			
研究室	各指導教員 研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目No.	MSL01-1R		授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	生活行為リハビリテーション学特論		担当教員 E-Mail	代表：上島 健		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	生活行為科学領域		選択必修	2 単位	前 期 (30h)
授業概要	生活行為向上マネジメントは療法士の包括的な思考過程をわかりやすく表したもので、対象者の 24 時間 365 日をイメージしつつ、本人の望む生活行為に行動計画の焦点があたるように設計する。生活行為リハビリテーションの 1 つである生活行為向上マネジメントは障害をもった高齢者向けに開発されたツールであり、「人は作業を通して健康や幸福になる」を基本理念と学術的エビデンスに基づき、リハビリテーションの立場に立った生活行為の自立を目指した介入モデルを理解する。 本講義では、様々な分野で支援している過程を理解し、多職種の連携と協働の重要性と在り方を生活行為の観点から学ぶ。					
到達目標	1. 地域包括ケアシステムと生活行為リハビリテーションの関係を説明ができる 2. 生活行為リハビリテーションの 1 つである生活行為向上マネジメントの説明ができる 3. 様々な分野で支援している過程を理解し、そこで用いられている評価を説明することができる 4. 多職種の連携と協働の重要性と在り方を通じて認知機能を重要視した支援の説明ができる					
授業回数	テーマ		内容		担当教員	
1	生活行為リハビリテーション概論		ガイダンス、生活行為に関連する支援		上島 健	
2	生活行為向上マネジメント概論		生活行為と生活行為の障害、適応範囲、プロセス（メインシートとサブシート）介入、課題の見直し、課題の申し送り）		武井 麻喜	
3	生活行為向上リハビリテーションの歴史		生活行為向上マネジメントの開発された経緯と背景、運用に当たってのマネジメント		武井 麻喜	
4	生活行為向上マネジメントの運用事例		実践上の課題、生活行為向上マネジメントの研修システム、今後の学術的発展に向けた展望		武井 麻喜	
5	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係 1		脳波を中心とする脳生理学的解析について		大嶋 伸雄	
6	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係 2		日中の活動量と睡眠リズムの関係などの脳生理学的解析について		大嶋 伸雄	
7	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係 3		認知機能と生活行為リハビリテーション支援における今後の展望		大嶋 伸雄	
8	地域包括ケアシステムについて		地域包括ケアシステムについて		嶋野 広一	
9	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性 1		多職種の連携ツールとしての生活行為向上マネジメント		嶋野 広一	
10	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係 4		脳波や自律神経活動を用いた作業活動と生活行為の解析について 1		白岩 圭悟	
11	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能との関係 5		脳波や自律神経活動を用いた作業活動と生活行為の解析について 2		白岩 圭悟	

12	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性 2	加齢に伴う心身機能の低下、生活環境、生活行為との関連性について	上島 健
13	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性 3	加齢に伴う心身機能の低下、生活環境、生活行為との関連性について	上島 健
14	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性 4	福祉用具・支援機器を活用した生活行為向上支援について 1	岸村 厚志
15	地域包括ケアシステムと生活行為向上マネジメントとの関連性 5・総括	福祉用具・支援機器を活用した生活行為向上支援について 2・総括	岸村 厚志
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	教科書	著者
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。		
参考文献			
事前・事後学修留意事項	これまでの臨床経験に基づいたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目である。授業時間外の学修も含まれる。		
研究室	1号館 上島研究室	研究室	開講時に提示する

科目No.	MSL02-1R		授業形態	演習	開講年次	1 年次
授業科目名	生活行為リハビリテーション学演習		担当教員 E-Mail	代表：上島 健		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	生活行為科学領域		選択必修	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	生活行為リハビリテーション学特論の講義を踏まえ、様々な心身機能障害に対する支援事例の分析を行い、目標の生活行為に焦点を当てたプログラム立案に至る過程を説明出来るための演習を実施する。演習中では、多職種との連携や協働、社会資源を活用による支援の必要性を踏まえ、リハビリテーションマネジメントを企画し、介入と効果検証のあり方を客観的な指標を用いた分析を行う演習を行う。					
到達目標	1. 臨床場面で経験した支援事例の報告ができる 2. 生活行為向上マネジメントを用いた臨床支援事例の分析が説明できる 3. 目標の生活行為に焦点をあてたプログラム立案の考え方が説明できる 4. 多職種との連携や協働、社会資源を活用による支援の必要性が説明できる 5. リハビリテーションマネジメントを企画し、その必要性について説明することができる 6. 介入と効果検証のあり方を客観的な指標を用いて分析して説明することができる					
授業回数	テーマ		内容		担当教員	
1	生活行為向上リハビリテーション事例の検討		ガイダンス・心身機能障害事例を通じた支援プロセスの分析		上島 健	
2	生活行為向上の客観的なエビデンスを用いた分析		実践された支援事例に対するグループ討議		上島 健	
3	生活行為向上マネジメントの評価・支援過程(面接・評価・目標立案)		発達障害領域における事例検討		武井 麻喜	
4	生活行為の工程を分析する方法と重要性		精神障害領域における事例検討		武井 麻喜	
5	生活行為向上マネジメントを用いた支援の実践事例		提示された事例に対する多角的な観点からの分析		武井 麻喜	
6	目標の生活行為に焦点をあてたプログラム立案の考え方		低下した心身機能に対する補完支援の分析		岸村 厚志	
7	目標の生活行為に焦点をあてたプログラム実践の考え方		福祉用具を活用した生活行為の機能向上支援事例の検討		岸村 厚志	
8	地域包括ケアシステムにおける多職種協働		介護老人保健施設における多職種と連携した支援の検討		嶋野 広一	
9	多職種との連携と協働の支援		介護予防への関わりと継続的な支援の検討		嶋野 広一	
10	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係 1		脳波や自律神経活動を用いた作業活動と生活行為向上に向けた支援事例の検討 1		白岩 圭悟	
11	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係 2		脳波や自律神経活動を用いた作業活動と生活行為向上に向けた支援事例の検討 2		白岩 圭悟	
12	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係 3		脳波などの生理学的指標からの症例分析 (障害児例) ～グループ討議～		大嶋 伸雄	

13	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係 4	脳波などの生理学的指標からの症例分析（成人例） ～グループ討議～	大嶋 伸雄
14	心身機能の障害を抱えた対象者の生活行為機能と認知機能の関係 5	脳波などの生理学的指標からの症例分析（認知症例） ～グループ討議～	大嶋 伸雄
15	総括	総括	上島 健
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	タイトル	出版社
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。		
参考文献			
事前・事後学修留意事項	これまでの臨床経験に基づいたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目である。授業時間外の学修も含まれる。		
研究室	1号館 上島研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSL03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2 年次
授業科目名	生活行為科学特別研究		担当教員 E-Mail	指導教員		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	生活行為科学領域		選択必修	8 単位	通年（120h）
授業概要	生活行為分析学、生活行為リハビリテーション特論・演習その他生活行為科学関連領域の授業を受けて、これらに関して研究の実践、指導を行い、リハビリテーション科学・作業療法学の立場から研究・論文作成を行う。 文献研究、調査研究、事例研究、介入研究等の手法を用いて、「地域における障害児・者、高齢者の生活行為の自立・自立支援促進」の課題の研究・論文作成を行う。					
到達目標	1. 生活行為科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 生活行為科学分野における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1～3	研究課題の決定	生活行為科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			指導教員	
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			指導教員	
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			指導教員	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			指導教員	
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			指導教員	
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			指導教員	
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			指導教員	
22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。			指導教員	
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			指導教員	
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			指導教員	

37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。		指導教員
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。		指導教員
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。		指導教員
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。		指導教員
成績評価方法		研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。		
教科書	著者	タイトル	出版社	発行年
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。			
参考文献				
事前・事後学修 留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。			
研究室	指導教員 研究室	オフィスアワー	開講時に提示する	

科目№	MSC01-1R		授業形態	講義	開講年次	1 年次
授業科目名	コミュニケーションリハビリテーション学特論		担当教員 E-Mail	宇都宮 洋才		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学 領域	選択必修	2 単位	前 期 (30h)	
授業概要	本科目では、リハビリテーションのベースとなる最近 20 年間に発展してきた認知科学と言語及び非言語コミュニケーション科学について、精神医学的な基礎、生理学的な基礎、生化学的な基礎、神経心理学的な基礎、心理学的な基礎を学び、それぞれの観点から臨床・研究における視点を学ぶ。また、認知症をはじめとする様々な精神神経疾患の認知機能・言語症状・非言語コミュニケーション障害の特性や発現機序に関する従来の知見・仮説などを学修し、それぞれの障害に対するリハビリテーションの技術と理論について学ぶ。					
到達目標	1. 高次脳の発達と認知機能の加齢変化について生理学的に説明ができる。 2. 認知機能とコミュニケーション機能の分析法や検査法について説明できる。 3. コミュニケーションの機能とそれを支える認知機能について心理学的評価法やリハビリテーションへの心理学的アプローチについて説明できる。 4. 認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査の評価とリハビリテーションについて説明できる。					
授業回数	テーマ		内容		担当教員	
1	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント 1		講義オリエンテーションと、コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてのサプリメントの効果について、特に梅などの自然食品について学修し、ディスカッションする。		宇都宮 洋才	
2	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント 2		コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品として不飽和脂肪酸(EPA, DHA など)のサプリメントの効果について学修し、ディスカッションする。		宇都宮 洋才	
3	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント 3		コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてビタミン A, C, E などとアポリポ蛋白の効果について学修し、ディスカッションする。		宇都宮 洋才	
4	認知機能とコミュニケーション機能の基礎		認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路について学修しディスカッションする。		武田 雅俊	
5	認知コミュニケーション機能障害の発症機序と病態、分類		認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路について学修しディスカッションする。		武田 雅俊	
6	認知コミュニケーション機能障害への対応法、治療法		認知症患者の事例をもとに、診断や対応法と共に、適切なリハビリテーションの手法について学修しディスカッションする。		武田 雅俊	
7	高次脳機能の発達と加齢変化		認知コミュニケーション機能に繋がる高次脳の生理学的基盤と障害に繋がる変化の概要を学修しディスカッションする。		芦塚 あおい	

8	脳機能の測定法(脳波分析)	脳波測定の基礎と分析法、評価について学修しディスカッションする。	芦塚 あおい
9	脳機能の測定法(NIRS 分析)	その他の NIRS を含む脳神経活動の測定法と評価について学修しディスカッションする。	芦塚 あおい
10	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基礎	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基盤について学び、ディスカッションする。	河野 良平
11	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学・細胞生物学的検査法	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査方法について学び、ディスカッションする。	河野 良平
12	認知コミュニケーション機能障害における生化学・細胞生物学的検査の評価とリハビリテーション	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査の評価とリハビリテーションについて学び、ディスカッションする。	河野 良平
13	認知コミュニケーション機能障害と脳イメージングによる評価	認知・コミュニケーション障害と脳イメージング研究の技法について学び、ディスカッションする。	塚本 能三
14	認知コミュニケーション機能障害の言語聴覚学的分析と機能回復	認知機能の 6 つのドメインに関する認知機能障害からの機能回復におけるコミュニケーション過程を分析する手法について学び、ディスカッションする。	塚本 能三
15	認知コミュニケーション機能障害の言語臨床研究とリハビリテーション	認知症のコミュニケーション障害における最近の新しいコミュニケーション研究の視点と理論について学び、ディスカッションする。	塚本 能三
成績評価方法		各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する	
教科書	著者	教科書	著者
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。		
参考文献			
事前・事後学修留意事項	配布資料や抄読文献は予習して質問事項など整理し、毎回の復習に1時間以上かけること。		
研究室	研究科棟5階 宇都宮研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSC02-1R		授業形態	演習	開講年次	1 年次
授業科目名	コミュニケーションリハビリテーション学演習		担当教員 E-Mail	宇都宮 洋才		
基本項目	科 目 区 分			単 位 数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学 領域		選択必修	2 単位	後 期 (30h)
授業概要	コミュニケーションリハビリテーション学特論の講義を踏まえ、症例検討と論文講読を通してさらに深く認知機能とコミュニケーションリハビリテーションについて学ぶことを目的とする。 これまでの臨床に有用な科学的エビデンスについて、課題の設定、研究デザイン、研究方法、データ分析、結果の解釈を客観的に議論し、各自の研究につなげる。また、研究の視点をもって高度の臨床活動を行うと同時に、問題発見能力を育て、新たな理論や臨床技法を創出することにつなげる。					
到達目標	認知機能とコミュニケーション機能障害とそのリハビリテーションについて、以下を目標とする。 1. 臨床事例を客観的に議論し研究課題を整理できる。 2. 文献から必要な情報を得て、学術的背景からディスカッションできる。					
授業回数	テーマ		内容		担当教員	
1	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント 1		コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてのサプリメントの効果について、特に梅などの自然食品についてディスカッションする。		宇都宮 洋才	
2	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント 2		コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品として不飽和脂肪酸(EPA, DHA など)のサプリメントの効果についてディスカッションする。		宇都宮 洋才	
3	認知機能とコミュニケーション機能低下を予防するサプリメント 3		コミュニケーションの機能およびコミュニケーションを支える認知機能低下を予防する食品としてビタミン A, C, E などとアポリポ蛋白の効果について、ディスカッションする。		宇都宮 洋才	
4	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路と機能障害 (1)		認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路についての最新文献を精読し、認知・コミュニケーション機能障害の症例研究とその病態発症機序について事例ごとに検討する。		武田 雅俊	
5	認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路と機能障害 (2)		認知機能とコミュニケーション機能の脳内回路についての最新文献を精読し、認知・コミュニケーション機能障害の症例研究とその病態発症機序について事例ごとに検討する。		武田 雅俊	
6	認知症患者の事例研究における診断や対応法		認知症患者の事例研究に力を入れ、診断や対応法と共に、適切なリハビリテーションの手法について検討する。		武田 雅俊	
7	認知機能障害とコミュニケーション障害を呈する病態①脳血管障害		認知機能障害とコミュニケーション障害を呈する病態について、脳血管障害を中心に学ぶ。		上田 有紀人	
8	認知機能障害とコミュニケーション障害を呈する病態②神経変性疾患		認知機能障害とコミュニケーション障害を呈する病態について神経変性疾患を中心に学ぶ。		上田 有紀人	

9	認知機能障害とコミュニケーション障害における神経心理検査の重要性	認知機能障害やコミュニケーション障害を検出する各種神経心理検査の特徴とその重要性について学ぶ。	上田 有紀人
10	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基礎	認知機能とコミュニケーション機能の生化学的基盤についての最新文献を精読し検討する。	河野 良平
11	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学・細胞生物学的検査法	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査方法についての最新文献を精読し検討する。	河野 良平
12	認知コミュニケーション機能障害における生化学・細胞生物学的検査の評価とリハビリテーション	認知コミュニケーション機能障害の生化学的指標、生化学的検査の評価とリハビリテーションについての最新文献を精読し検討する。	河野 良平
13	認知コミュニケーション機能障害と脳イメージングによる評価	認知・コミュニケーション障害と脳イメージング研究の技法について最新文献を精読し検討する。	芦塚 あおい
14	認知コミュニケーション機能障害の言語聴覚学的分析と機能回復	認知機能の6つのドメインに関する認知機能障害からの機能回復におけるコミュニケーション過程を分析する手法について最新文献を精読し検討する。	芦塚 あおい
15	認知コミュニケーション機能障害の言語臨床研究とリハビリテーション	認知症のコミュニケーション障害における最近の新しいコミュニケーション研究の視点と理論について最新文献を精読し検討する。	芦塚 あおい
成績評価方法	各授業科目における理解度・小テスト(50%)、筆記試験・レポートなど(50%)で総合的に評価する		
教科書	著者	教科書	著者
	特に指定しない。研究テーマに沿って教科書、参考書、文献を紹介する。		
参考文献			
事前・事後学修留意事項	配布資料や参考文献は予習して質問事項など整理し、毎回の復習に1時間以上かけること。		
研究室	研究科棟5階 宇都宮研究室	オフィスアワー	開講時に提示する

科目No.	MSC03-2R		授業形態	演習	開講年次	1-2 年次
授業科目名	コミュニケーション科学特別研究		担当教員 E-Mail	指導教員		
基本項目	科目区分			単位数		履修期間
	専門科目	コミュニケーション科学領域		選択必修	8 単位	通年（120h）
授業概要	本研究科で履修した教育研究の知識と技術を基礎に、各大学院生の研究課題について各種研究手法に沿った分析や検証を加え、リハビリテーション科学・コミュニケーション学を基盤とした研究・論文指導を行う。身につけた知識と技能を統合し、様々な問題解決と新たな価値の創造に結び付く能力や姿勢を育成するために、丁寧な個別指導のもと、研究の実践、研究・論文指導を行う。各大学院生の経験と背景に応じて、高度な臨床実践者・研究者としての基本的能力を修得し、認知機能とコミュニケーション機能に関するそれぞれの課題を再度整理するとともに、各種の技術についても高度化を目指す。 認知機能低下に起因するコミュニケーション機能解析のための脳機能画像解析、脳波解析・精神神経薬理学的解析。分子遺伝学的解析法を用いて、認知・コミュニケーション機能についての研究・論文作成を行なう。					
到達目標	1. 認知機能とコミュニケーション科学領域におけるリハビリテーションの発展に貢献できる研究課題を設定し、研究を企画・計画・実施し、研究成果を発表する能力を身につける。 2. 修士論文の作成を通して、地域住民や実践者・教育者とのネットワークを構築し、研究遂行能力を修得すると共に、実践者や後輩を指導する技術を身につける。 3. 認知機能とコミュニケーション科学における高度医療専門職として、幅広い学識と倫理観を有し、予防リハビリテーションや地域リハビリテーションの発展に寄与し、地域もしくは臨床の場でチームリーダーとしての役割を果たす能力を身につける。 4. 修得した専門能力、研究能力を教育・研究に生かし、リハビリテーション医療学の発展に寄与することができ、リハビリテーション学・認知リハビリテーション学分野での実践の向上に貢献できる能力を身につける。					
授業回数	テーマ	内容			担当教員	
1～3	研究課題の決定	認知機能とコミュニケーション科学領域への興味・関心と文献調査などから当該分野の既知と未知を明らかにし、研究テーマの背景と意義を明確にした上で、研究課題を決定する。			指導教員	
4～8	研究計画の立案	研究課題の解決に必要な取り扱う変数の抽出と研究デザインを考え、研究計画を立案する。			指導教員	
9～11	研究計画書の作成	研究課題に沿った、研究対象、方法などを検討し、研究計画書を作成する。			指導教員	
12	研究計画の発表および評価	研究計画を発表し、評価を受ける。			指導教員	
13～14	研究計画書の修正	研究計画の発表で受けた評価に基づき、研究計画書を修正する。			指導教員	
15～16	研究倫理申請書の作成	研究対象、研究内容に沿った倫理申請書を作成する。			指導教員	
17～21	予備研究等の実施	研究の準備を行い、予備研究を行う。			指導教員	

22～28	研究の実施（前半）	研究計画に基づき、研究を行う。			指導教員
29～35	研究の中間まとめ	研究の中間まとめを行い、中間発表会に向けて資料作成を行う。			指導教員
36	研究中間発表	研究の中間まとめの公開発表を行う。			指導教員
37～44	研究の実施（後半）	研究中間発表の結果を踏まえ、研究をさらに発展させる。			指導教員
45～48	研究結果のまとめ	研究結果を科学的・客観的に考察し、まとめる。			指導教員
49～58	論文作成	研究結果のまとめに基づいて、追加実験などを行い、その結果を論文として完成させる。			指導教員
59～60	論文の発表および評価	修士論文の内容を公開発表会で発表し、最終試験として評価を受ける。			指導教員
成績評価方法		研究態度、研究発表会審査結果、論文審査結果により総合的に評価する。			
教科書	著者	タイトル		出版社	発行年
	特に指定しないが、研究課題に沿った参考書や文献を用いる。				
参考文献					
事前・事後学修留意事項	これまで学修してきたことを復習しながら、主体的に目標を達成していく科目であるため、多くは授業時間外学修が主体となる。				
研究室	各指導教員 研究室		オフィスアワー	開講時に提示する	